



 福岡銀行

環境に配慮し、海と共に歩む。

ことぶきかい
うん
寿海運株式会社

取締役会長

いた どころ
さだ お
板床定男氏

代表取締役社長

いた どころ
しん た ろう
板床慎太郎氏

取引店／福岡銀行大牟田支店

十八親和銀行本店営業部
十八親和銀行久留米支店

■会社概要

創業:1918年／設立:1969年／所在地:福岡県大牟田市／資本金:2,300万円／従業員:19名(2021年8月末現在)／事業内容:外航船舶貸渡業、海上貨物運送業／グループ企業:祐徳近海汽船株式会社、株式会社ライジングネクスト、KOTOBUKI SHIPPING CORPORATION, S.A.(パナマ)、YUTOKU SHIPPING CORPORATION, S.A.(パナマ)、MERCURY CARRIER CORPORATION, S.A.(パナマ)、合資会社丸井海運商会

会社ホームページ
(祐徳近海汽船)は
こちらからどうぞ!





新造船「KAURI(カウリ)」デッキ最上階にて(左から板床慎太郎社長、柴戸頭取、板床定男会長)

三池炭鉱の積み出し港で 海運業を開始

江戸期に石炭採掘が始まり、明治政府が官営事業として力を注いだ三池炭鉱。「月が出たでた〜」の歌い出しでお馴染みの「炭坑節」にも登場し、最盛期には全国出炭量の10%を超える年間657万トンを掘り上げたという隆盛の一方で、その歴史においては、長期にわたる労使間の対立が表面化した「三井三池争議」や、大勢の死傷者が出て戦後最大の炭鉱事故となった炭塵爆発事故、有明鉱火災事故といった痛ましい出来事もありました。

三池炭鉱は1997年にその役割を終えて閉山しますが、その遺構は国の重要文化財や登録有形文化財、さらには世界文化遺産にも登録されており、ここ大牟田の歴史を語るうえで欠くことのできない存在となっています。当社のルートもまた、この三池炭鉱と深い関わりがあるのです。

私(慎太郎社長)の祖父・末太郎は、島原半島最南端にある天然の良港・口之津港で、大牟田港から石炭を運ぶ団平船の船員として

従事していました。三池港の開港により石炭積み出しの拠点が三池港に移るに伴い、祖父は、1918年に独立し、創業しました。

そして戦後の1953年に合資会社丸井海運商會を興すと、父・定男(現会長)は1958年、学校を卒業するとともに家業である同社に入社。そこから多くの苦難困難を乗り越えつつ、海運事業に邁進していきます。

木造船が主流だった時代にいち早く、西日本初となる鋼船を建造して注目を集めるなど徐々に社業を軌道に乗せていきます。祖父は父を含む息子3人に一隻ずつ船を任せ、三井一筋であった創業者の意志は次世代にしっかりと引き継がれることとなり、人との出会いと縁を大切に、当社およびグループ会社の経営の礎が築かれました。

将来を見越して

外航海上輸送事業へ進出

当社の事業がまだ石炭輸送が主軸であった1980年、セメント専用船を建造することを決意します。炭鉱の先行きを見据え、事業



3 1



5



4 2



6





板床慎太郎社長

の多角化を図つての決断でした。その後も、コンテナ船から鋼材船、製紙専用船等の建造にも乗り出し、また冷凍コンテナ船を建造して鉄道輸送に対抗して神戸・博多間を一昼夜で航行できる体制も整えました。さらには、三池港を拠点として、大川の家具などの物流に貢献し、地場産業の活性化にも努めてまいりました。

いよいよ三池炭鉱の閉山が迫ってきた1995年には、大型船を建造し、当社初となる外航海上輸送への進出を果たします。現在の主な事業でもある「外航船舶の貸渡業」とは、荷主の要請でさまざまな貨物を輸送するオペレーターに対して、自社が所有する

外航船を貸し出す事業です。

船舶の貸し出しには2種類の契約方法があり、船に船員を乗り組ませた形で一定期間、先方の利用に供する「TC(定期備船)契約」と、船員は付けずに船舶のみを貸し出す「BBC(Bare Boat Charter)契約」です。現在当社を含むグループで運航中の外航船13隻のうち9隻が定期備船契約で、4隻がBBC契約となっており、現在さらに2隻の外航船を建造中です。

多様な船舶を航行させる海上部門と

地域環境に貢献する陸上部門

外航海上輸送に進出した後も、1998年には内航新造船の2隻同日進水を果たし、内航海運事業を推し進めます。また2003年には、大牟田市の委託を受けて一般廃棄物の収集運搬を行う陸上業務に進出して地元の公衆衛生の向上に尽力する一方で、九州地方整備局より調査観測兼清掃船の運航委託を受けて有明海、八代海の海洋環境向上に努める、



11 9

企業努力を積み重ね、
皆様からの
厚い信頼を胸に
大海原に漕ぎ出します!



10



8



1.新造船「KAURI」命名・引渡式の祝賀イベント(写真は餅まき)／2.命名式／3.くす玉が割られ、風船が舞い上がる／4.5.「KAURI」見学風景／6.警笛を鳴らす柴戸頭取／7.「KAURI」甲板／8.9.社員一同で「KAURI」を見送り／10.保有船の一例:自動車運搬船／11.企業メッセージ



左から板床慎太郎社長、板床定男会長、柴戸頭取、立木支店長(福岡銀行)

といった具合に多方面へと事業領域を拡大していきました。

翌2004年は、当社初のプロダクトタンカー(石油製品を輸送するタンカー)を始めとして、内航船、近海船を含め、3隻の新造船を建造しました。2011年には、ばら積み船(主に石炭や鉄鉱石を輸送する船)の中で最大級のケーブサイズ型貨物船を初建造しました。2013年には自動車専用船を購入し、2015年にはさらに2隻のケーブサイズ型ばら積み船を購入するに至りました。そして同年には、九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所の港湾業務艇の運航委託を受けています。

海運事業と並行させながら、2013年に大牟田市の許可・登録を受けて浄化槽の維持管理および清掃を開始する傍ら、太陽光発電事業にも参入して発電所を竣工しました。

このように現在、当社はグループ会社と連携しながら、外航船13隻の所有と内航船2隻の運航管理を担当する海上部門と、地元の一般廃棄物処理とメガソーラー事業などを



板床定男会長

手がける陸上部門の両輪で、事業を多角的に展開しています。

国際情勢や世界経済に関わる 海運事業の責任と姿勢

昨年、私は父から代表取締役社長の職を引き継ぎました。これまでご紹介してきた内容からもおわかりいただけるかと思いますが、外航船舶の貸渡業は、多額の資金を必要とする事業であり、投資すべき案件の見極めが重要な鍵となります。そして、海運業を取り巻く環境は、常に激しく変化し、鋼材価格の上昇、環境保全のための造船規制強化などに対応して、

厳しい経営判断を迫られる場面が、年々増加しているように感じます。例えば、自動車専用船を建造したとして、もしも数年後に電気自動車（EV）の占める割合が一気に増えた場合、ガソリン車より重量のある電気自動車に対応する仕様の専用船に切り替える必要が生じるかもしれません。そういった意味では、海運業界に生きる私たちは、常に岐路に立たされているともいえます。

また、大規模輸送で行われる外航海上輸送は、ひとたび海難事故に巻き込まれると、国際情勢や世界経済に大きな影響を与えます。と同時に、船の運航に関わったあらゆる企業は、責任と姿勢を問われることとなります。そのため、当社のような船舶貸渡業を担う会社は、知見を高める努力を積み重ねて、多くの信頼を得られる存在であり続けなければなりません。

お取引先である海運会社、資金面でのパートナーである銀行、造船所、そして地域の皆様から、広く厚い信頼を集められる組織となれるよう、日々の活動を通じて成長していきたいと考えています。

■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 柴戸 隆成

三池炭鉱の石炭積み出しに端を発し、今では自動車や鋼材など、さまざまな物資の外航・内航海上輸送事業を担われ、これまで永く地元・大牟田の発展にご尽力されてこられました。

船舶事業のみならず、廃棄物処理、海上清掃、港湾整備等にも従事されるなど、地域や行政機関の要請に応え、地域社会に貢献する事業分野にも領域を拡げておられます。

今後も国際的な物流を支えつつ、地域社会への寄与につながる活動を通じて、ますます発展されることを祈念いたします。





 熊本銀行

名城を望む極上の空間。

山海の恵みとおもてなしの心で、

愛される日本料理店へ。

城見櫓 共和観光 株式会社

代表取締役
林 祥増 氏

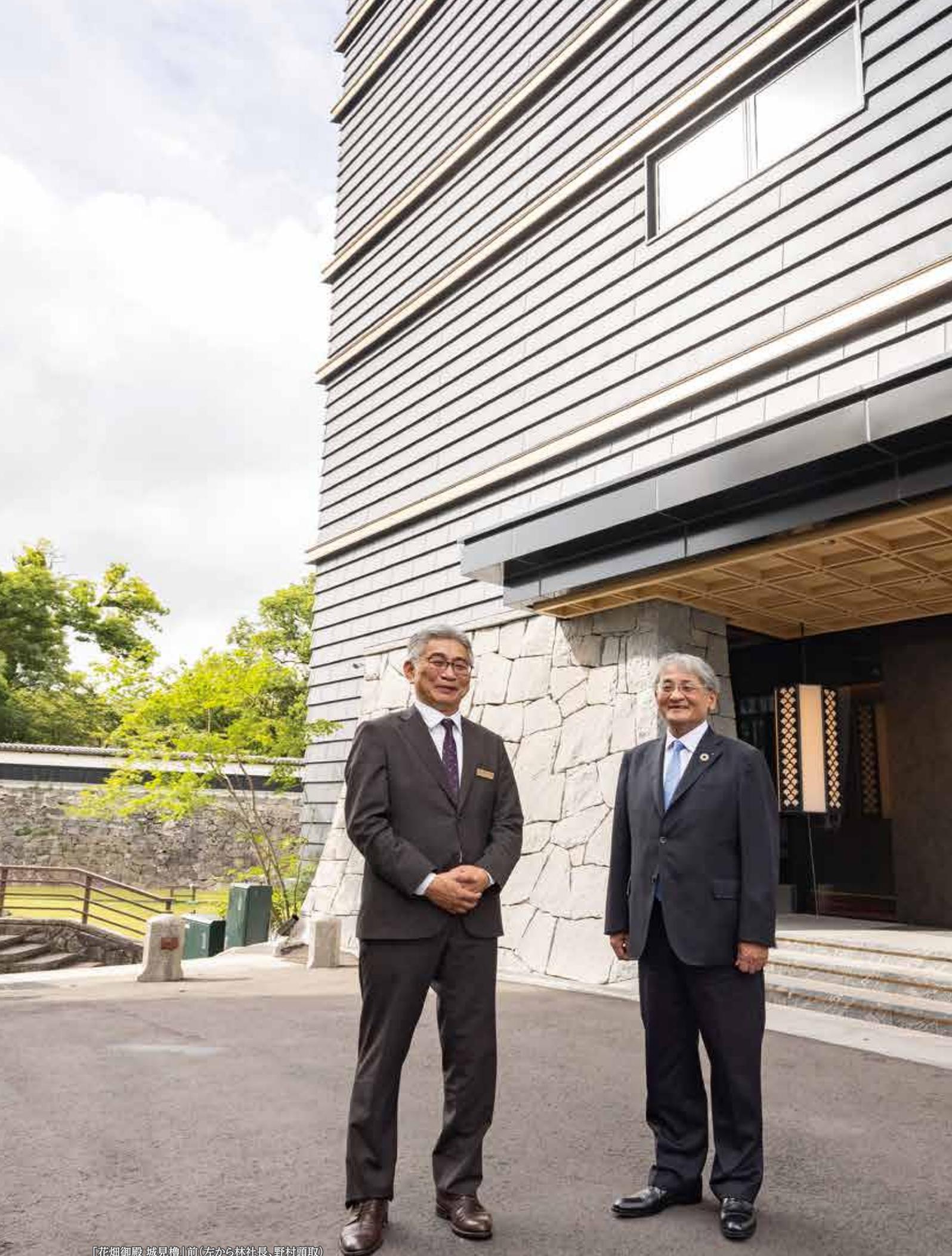
取引店／熊本銀行 下通支店

■会社概要

設立:1969年／所在地:熊本市中心区／資本金:
5,000万円／従業員:53名／事業内容:飲食業
(日本料理店「花畑御殿 城見櫓」経営)

店舗ホームページは
こちらからどうぞ!





「花畑御殿 城見櫓」前(左から林社長、野村頭取)

ナイトクラブとして創業 海外での貴重な体験

未曾有の被害をもたらした熊本地震から5年。「花畑御殿 城見櫓」は今春、華々しくよみがえりました。眼前に広がる熊本城の雄姿とともに新たな歴史に向かって踏み出しています。

私の祖父母は中国・福建省出身の華僑で、1920年前後に日本に渡りました。決して裕福な家庭などではなく、熊本では山を越えた先の地域まで衣料等の生活用品を行商するなどして生計をたて、少しずつ蓄財したそうです。祖父は父・継發(現・当社会長)ら兄弟とともに、熊本でスーパーマーケット「ニコニコ堂」を創業すると、ただちに成功を収め、出店攻勢をかけます。圧倒的なビジネスセンスを持つ父はそこで共和観光株式会社を設立し、熊本市内の繁華街でナイトクラブ「スピカ」をオープンしました。今から50余年前の1969年のことでした。

当時、私は小学生で、両親があまりの忙しきでかまってくれなかったことから、この頃始めた野球に打ち込んでばかりいました。中学・高校は地元の九州学院に進学し、強豪校で最後まで野球をやり通しました。そういった経験も今の私の糧となっているのではないかと思います。

高校を卒業すると、海外を自分の目で見て回ることを決意します。祖父母の故郷でもある福建省をはじめ東南アジアやアメリカなど世界各地をひとりで、かつ働いて収入を得ながら巡りました。この海外で生活した経験のおかげで「いざとなったら何とかなる」という、勝負の度胸とビジネスの勘を身に着けられたのではないかと思います。

カラオケパブから日本料理店へ 積もる父との確執

20歳で帰国した際、空港からの帰り道で父からカラオケパブを運営するよう命じられました。当然初めての経験ではありましたが、どうしたら繁盛するか店づくりや料金設定などを考えると同時に、同級生にスタッフを頼むなどしてわずか1か月後の21歳の誕生日にオープンしました。すぐに女性客から人気を得て、毎日行列ができるほどの賑わいとなり、繁華街中のカラオケ店のお客様をすべて集めたかのように連日盛り上がりしていました。

ところが私が23歳の時に、父が既に購入していた熊本城長堀前の日本旅館があったこの土地に当時5億円ほどの建設費をかけてビルを建設し、ナイトクラブや日本料理店を混在して





林社長

入居させ、その日本料理店の総支配人になることを私に命じたのです。折しもカラオケパブを自分の思い通りに運営して軌道に乗せていた時期に、経験のない飲食店の総支配人を命じられたことで、父との確執が生まれはじめます。私が命名した「城見櫓」ですが、父の経営方針に従うほかありません。名の通った料理人を置いていたためお料理自体は良かったものの、お客様の半分は熊本城が見えにくい店づくりで、お客様をお見送りする際にお顔を伺うと、とても満足していただけのように感じられませんでした。それでも父から業績の全責任を問われ、しばしば衝突しそうなこともありました。とても父に逆らうことなどできませんでした。

私が30歳の時、ついに父から逃げるように熊本を離れました。これまで修業をしたことになかった私が東京都内の飲食店で修業することにしたのです。それも毎日朝から飲料配達、居酒屋、焼肉レストラン、ナイトクラブ等で皿洗いや働き始めました。そこから休みなく必死で働き、大赤字の焼肉レストランを1か月で黒字転換させるなどの実績を残しました。それから福岡、熊本へと修業場所は変わりますが、熊本では名の通った2店舗のカラオケボックスをプロデュースするなどの成功を収めました。

城見櫓に戻ったのは39歳の時。生まれ変わった私は頭を丸めて厨房の仕事から、文字通り一からやり直す覚悟でした。しかしそこで見た光景は東京の焼肉レストランと変わらない状況。このままではすぐに潰れてしまうと考え込んでいた時、アルバイトとして一緒に皿を洗っていた坂元(現取締役営業部長)が、「支配人、この立地がもったいない。せめて観光料亭にしませんか」と言うのです。その言葉に心打たれた私はすぐに決心をし、坂元とともに新たな城見櫓の構築を目指しました。

まず手始めに父を辛抱強く説得して経営方針を変え、食事を主体とする日本料理店に改装。多くのお客様に熊本城の光景を楽しんでもらえるようリーズナブルな料金設定にし、観光客を呼ぶ際には前職でツアー営業をしていた坂元が大いなる力を発揮してくれました。



11 9



10



7



8

1.2.対談風景／3.4.見学風景／5.3階個室宴会場「銀麟」／6.郷土料理会席一例／7.5階メインホール「城宴」／8.婚礼料理一例／9.屋上庭園夜景／10.正面玄関夜景／11.店舗メッセージ



屋上庭園「天城」にて(左から奇能^{きの}部長、林芽衣マネージャー、林奈美部長、林祥増社長、野村頭取、大原支店長(熊本銀行)、坂元部長、何川^{なにかわ}主任)

九州新幹線が2004年に部分開通、2007年に熊本城築城400年、2011年に九州新幹線全線開通と、国内外から多くの観光客が熊本に訪れるようになり、当社の業績も年々改善。ついには年間9万人ものお客様にご来店いただけるようになりました。

熊本城の復旧とともに 被災5年目に再建

2016年4月、最大震度7の熊本地震によつて、熊本城は国指定重要文化財の長塀をはじめ、櫓や天守閣など城全体が大きな被害を受けました。城見櫓も道路との間に段差が生じ、ガラスが割れ、調理場のガス管も寸断したことから営業できずに、父は閉店を決めました。会社解散となる日、私を含めた全従業員が解雇されることになり、従業員は皆涙を浮かべていましたが、私は「俺が必ず店を再建し、皆に帰ってきてもらう」と固く誓ったのです。

その後、ビルの被害状況を詳しく調査すると、構造自体に問題はなく、補修をすることで営業を再開できることが確認されました。そこで新たに運営会社「祥福」を設立して再建への一歩を踏み出しました。7月下旬には1、2階部分で店を再開し、10月には全館で再開を果た

しました。

父はこんな私の仕事ぶりを見ていたのでしょう。「社長をせんか」と言う父の言葉に押されて2018年2月、私は共和観光株式会社の社長に就任しました。

2019年4月、国の復旧補助事業の対象になったこともあり、既に購入していた隣接地と合わせ、約10億5,000万円をかけて1階が調理場、2階がレストラン、3、4階が宴会場、5階が結婚式のできる大ホール、6階が迎賓庵と展望所とする新しいビル建設に着手しました。どの部屋からも熊本城の全景を見られるように工夫し、地震からちょうど5年に当たる2021年4月14日についてリニューアルオープンを果たしました。

父はそれまで私を褒めたことは一度もありませんでしたが、この時初めて「よくやったな」と言ってくれました。今振り返ると、父の背中を見ながら人に対する気遣いや気の持ち方、圧倒的なビジネスセンスを学んだと思っています。

お客様から愛される お店づくりを目指して

熊本城は、肥後熊本藩初代藩主加藤清正が心血を注いで築いた名城であり、「森の都・

熊本」のシンボルです。昼はまばゆい陽光、夕方は鮮やかな夕日の中で輝き、夜はライトアップによって幻想的な姿を見せます。樹木に囲まれた城郭は春夏秋冬、四季折々の姿を見せ、見飽きることはありません。

城見櫓では、伝統と格式を大事にする日本料理と、歴代の藩主を喜ばせた山海の恵みあふれる郷土料理を、「おもてなしの心」で提供しています。

お城の壮麗なたたずまいとともに歴史のロマンスを五感で味わっていただける場として、一度お越しいただけますと必ずリピートされることでしょう。完全予約制にしていますが、予約が途切れることはなく、おかげさまで安定した経営を続けています。

熊本城は新型コロナウイルス感染防止のためにしばらく閉鎖されていましたが、今年7月に再開され全国から多くの観光客が来城されていることから、当店もこれまで以上に観光客の皆様へのアピールに力を入れています。また、結婚式をはじめとして若い方々のお祝い事にも使っていただき、より多くの地元のお客様から愛され親しまれるお店づくりをしたいと思っています。

これからも熊本城の心と誇り「城郭の四季」で、熊本城を訪れる皆さまをオンリーワンの郷土料理、日本料理でおもてなしさせていただきます。

■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 野村 俊巳

かつて熊本最大のスーパーマーケットチェーンを経営された林会長が手掛けられた日本料理店「城見櫓」を受け継ぎ、林社長はご苦勞の末にも卓越した経営手腕で、多くのお客様におもてなしを実践してこられました。5年前の熊本地震では大きな打撃を受けながらも、それを見事に乗り越えられ、この春ついにリニューアルオープンを果たされています。

眼前に熊本城を望む絶好のロケーションを活かし、これからも熊本城とともに輝き続け、多くのお客様に美しい熊本城の四季の移ろいを感じていただくことを期待しています。





十八親和銀行

「企業は、人だ。」

人と人との絆を大切に

100年企業を目指す。

たくしまけんせつ
宅島建設株式会社

代表取締役

たくしまとしたか
宅島 寿孝氏

取引店／十八親和銀行小浜支店

■会社概要

創業:1946年／設立:1951年／所在地:長崎県雲仙市／資本金:9,000万円／社員:90名(グループ全体:370名)／事業内容:総合建設業、一級建築士事務所、不動産賃貸業、宅地建物取引業／事業拠点:(本社)雲仙市(営業所)長崎市、島原市、諫早市、南島原市／関連会社:大石建設株式会社、大起建設株式会社、株式会社クリーン雲仙、株式会社東邦、株式会社プラス建販、株式会社ランドトラスト他関連3社

会社ホームページは
こちらからどうぞ!





本社前(左から宅島社長、森頭取)

製塩業から建設業へ 業容の拡大を続け、 長崎県内の基盤を支える会社へ

当社は、もともと鉄工所を営んでいた祖父・宅島満壽美が、1951年に「宅島塩業有限公司」を設立したのが始まりです。その頃の小浜の海岸一帯は、温泉熱を利用した製塩業が盛んで、約50箇所の工場が林立。祖父も時流を読み、製塩業へ舵を切ったそうです。しかし、温泉の資源確保と、時代の流れとともに製塩業が衰退していったことから、1956年に建設業に進出し「宅島建設興業有限公司」に社名を変更しました。当時、社長である祖父が陣頭指揮をとり、各種工事へ積極的に従事。昼夜を問わない献身的な働きぶりが評価され、業容は拡大し続けたそうです。

とにかく現場主義で、厳しかったそうですが、厳しいことを言った後は、現場に差し入れを行うような優しさも持ち合わせ、昔気質でありながらもとても頼りになり、信頼される人だったと聞いています。

そして、1970年に宅島建設株式会社と社名を変えた当社をさらに大きくしたのが、

私の父であり、現グループ会長の宅島壽雄^{七お}です。厳しい祖父のもとで仕事を覚えた父は、病気がちになった祖父の代わりに早くから会社を任されていたそうです。オイルショックをなんとか乗り越え、1979年に代表取締役就任。現在の本社用地になる約5千坪の埋め立て工事、小浜マリーナ約3万坪の埋め立て工事、雲仙・普賢岳噴火による災害復旧工事など、島原半島の大規模な社会基盤事業に携わるようになりました。父の時代にM&A（合併・買収）によって、幅広くグループ会社が増え、長崎県内をカバーするようになっていきました。ただし、いつも話はこちらからではなく、向こうから。頼られると手を差し伸べてしまう、利益よりも人間的なつながりを大事にする父を頼ってきたのだと思います。

また、その拡大のなかで、島原半島のみならず長崎県内外のさまざまな事業に関わってきました。大型ショッピングモールなど他業種にも進出したこともありましたが、試行錯誤を繰り返しながら今に至っています。現在、グループ会社は、大石建設株式会社をはじめ、産業廃棄物などを扱う株式会社クリーン雲仙、土木・舗装の大起建設株式会社など



1



2



3



4



5



6



宅島社長

9社となり、それぞれの会社の強みを活かした事業で拡大を続けています。今思えば、困っている人を助ける父の姿勢が、今後100年企業を目指す当社の総合力の基礎を作り上げてくれたのだと思います。

時代の変化でも変わらない人のつながりを大切にして

私が2011年に代表取締役役に就任してから、今年で10年になります。「いつかは宅島建設で働くだろう」という思いはあったものの、大学卒業後は、父の勧めで「ハウステンボス」に就職しました。その当時、ハウステンボスで計画されていた新規ホテルの開業にあわせて、

総務・人事面など開業に向けた色々な業務に携われたことは、その後の自分に大きな影響を与えてくれたと感謝しています。

3年ほど勤務した後に、宅島建設に入社。営業や管理などを学びながら、当時社長であった父の代理として、様々な場所へ顔を出し、社内外で起こる全ての出来事を肌で感じていました。特に現場の変化は顕著で、祖父や父の時代と違い、建設業もパソコンによる事務作業が主流となり、業務そのものが大きく様変わりしたと感じています。

そんなIT化が進む一方で、当社は、心を持つ人と人のつながりを大切にして、さまざまな地域貢献に取り組んでいます。まずは、雇用。社員は地元の高校生を積極的に採用するようにしており、学歴に関係なく本人のやる気次第で成長できる環境を整えています。おかげさまで、定着率も良く、一人ひとりの人間力が、当社の強みになっています。もう一つ、生まれ育った地元への恩返しから、将来を担う子どもたちへの支援を行っています。宅島建設杯と名が付いている「長崎県ジュニアユースサッカー選手権大会」は今年で29回目を数えます。親子2世代にわたり参加していると



7



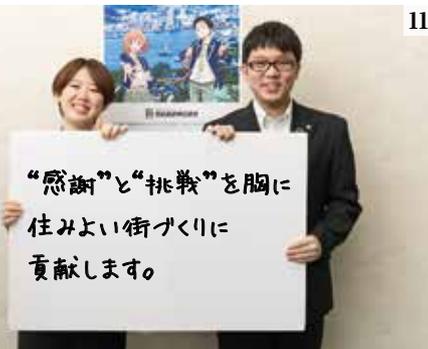
11 9



8



10



11 9

1.対談風景/2.3.施設見学/4.創業者 宅島満壽美氏像/5.第27回宅島建設杯長崎県ジュニアユースサッカー選手権大会/6.70周年キャラクター土田陽葵、建山蒼/7.一般国道251号橋梁整備工事(1号橋床版工)/8.島原市保健センター新築工事/9.アメイジ諫早城見町パーク&リバーサイド完成予想図/10.恵燈保育園新築工事/11.企業メッセージ



本社屋上にて(前列左4人目から竹野常務、宅島社長、森頭取、宮島支店長(十八親和銀行))

いう方もいるほど歴史を重ねてきました。2021年5月には、地元への感謝と子育て支援を目的に、雲仙市に対し寄付金を贈呈しました。コロナ禍などで大変な思いをしている子どもたちのために、少しでも役立てていただければと願っています。社会を担うのは人であり、人を支える活動にこそ、未来が開けるとの思いから、地域・社会貢献へ積極的に取り組んでいます。今後も、人・地域の未来に貢献できる活動に力を入れていきたいと思っています。

新たなイメージ定着と

環境・理念の追求で

70周年を飛躍のチャンスに

2021年3月、当社は70周年を迎えました。スローガンである「夢をかたちに」をさらに実現していくために、支えてくださった多くの方に感謝しつつ、これまで培ってきた経験と誇りを大切に、これからもふるさとの発展に貢献していきたいと思っています。

70周年を機に、暮らして土木・建築を感じながら成長する高校2年生の男女のキャラクターが誕生しました。土木・建築のイメージを

一新するようなキャラクターに驚かれた方も多かったようですが、若い人には特に好評で、このキャラクターを通して業界の理解を深めていただき、若い世代の関心につながればと願っています。

また、当社では社員の健康確保・増進と明るく元気に働ける職場の実現のため、健康経営への取り組みや、現在急速に認知が広がっているSDGsへの取り組みを積極的に行っています。社員が働きやすく、成長できる機会の提供や、環境・技術・教育などの社会的取り組みが評価され、「健康経営優良法人2021」・「SDGs認定」にも繋がりました。

さらに、経営理念と企業理念を生かすためのスローガンも刷新。今までの5つの「C」に変わり、今後は7つの「C」を掲げていきます。 「Change」変革を恐れず現状に満足しない、「Continue」いいことは継続する、「Challenge」積極的に挑戦する、「Chance」機会を掴み取る、「Consensus」意思統一を図る、「Connect」繋がりを深める、「Communication」対話を通して互いに理解し合うと決めました。私を含めた社員一人ひとりがこの「C」を実践することで、人

企業・地域発展の力となります。これまで以上に意識を高め、この変化の時代でも対応できる企業でありたいと思っています。

「企業は、人だ。」を大切に 100年企業を目指して

当社は「企業は、人だ。」と考えています。確かな技術はもちろんですが、何よりも大切にしたいのは、人と人のお付き合い、人の絆の力です。作って終わりではなく、引き渡した後メンテナンスを今まで以上に大切にしながら、このつながりを次につなげていきたいと考えています。その思いが積み重なっていくことで、80年、90年、そして100年へと命をつないでいきたいと決意を新たにしております。

私の好きな言葉は、「感謝・誠実・報恩」。今があることに感謝し、日々を誠実に生きたことで、お世話になった方、育ててもらったふるさとに恩返しできればと考えています。

宅島建設、そしてグループ全体で、それぞれの強みを発揮して、地域から必要とされる存在でありつづけるよう、これからも邁進してまいります。

■ インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 森 拓二郎

製塩業から始まり、今では多くのグループ会社を抱え、長崎県を代表する建設会社に成長されました。さらには人・地域・社会のために、スポーツやイベント、寄付活動など、様々な支援を積極的に行っておられます。

設立70周年を迎えられ、新たな挑戦を始められるとともに、若い世代への認知や、健康経営・SDGsへの取り組みなど、社会全体をより良くする活動にも貢献されています。人とのつながりを大切にされる理念のもと、地域貢献とともに、子どもたちに新しい夢と希望を与える企業として、さらなる活躍を期待しています。

